

涙なんか欲しくない

ベレン・パークハースト
山田小枝子 訳



文藝春秋新社

涙なんか欲しくない

昭和 39 年 6 月 10 日 発行

定価 280円

著 者 ヘレン・パークハースト

訳 者 山 田 小 枝 子

発行者 上 林 吾 郎

発行所 文 藝 春 秋 新 社

東京都中央区銀座西 8-4

印刷 凸版印刷

製本 大口製本

落丁乱丁がありました場合はお取りかえいたします

トニーの希い

この本のなかで、ぼくはトニーと呼ばれることになった。ほんとの名前じゃないが、あなたの前では、ぼくはトニーだ。

ヘレンさんが書いたぼくの一生を、あなたは、つくりものの話だと思うかもしれない。しかし、ほんとなんだ。二十四年間も、ぼくは、トニーは、現に生きてきた。まだチビだが、結婚もした。ぼくには、男の子と、女の子と妻とがいる。ぼくは責任のある人間なんだ。ぼくが今までどんなふうに生きてきたか、ぼくが登らなくてはならなかった山々と遭難、成功と失敗を信じて下さ。どの一つをとってみても、映画にでてくるようなつくりものじゃないのだ。鉄の心を持った不良少年のお話じゃない、普通の少年の話なのだから。そして、それが、本当のぼくだ。

子を持つ親たちの半分位はごく普通の人だろう。そういうのが要注意なんだ。あなたの子供が、なにかよくないことをしたのをみついたら、全力をつくして「何故」そんなことをしたのか考えてやって下さい。

たくさんの人が、非行少年の「なぜ」を知りたがっている。なぜけん銃をとって四人も殺したのか、なぜ十六の少女が麻薬を売ったのか、なぜ若い女の子がわけもなく体を投げ出すのか、なぜ街で愚連隊が一日中ごろごろたまっているのか。理由はかんたん、他にいくところがないからだ。みんな、もとめている。友だちがほしい。分りあえる仲間がほしいのだ。

トニーの話をきいて解ってもらえるだろうか。ぼくは、あなたに子供の育て方を押し売りしようとしてるんじゃない。生きてゆくとはどんなことを話そうとしているのでもない。同情を求めてもいない。なにもほしいなどと云ってはいない。だが、もし、一人でもいい、この話で、ぼくの過去のようなどろ沼から救われる人間がいたら、ぼくは、うれしい。

目次

第一章	ギャングの息子	5
第二章	卒業式の日	19
第三章	曲った小枝	27
第四章	遊び仲間とギャング仲間	35
第五章	麻薬	47
第六章	刑務所	72
第七章	キャンデー・ストアの天使	107
第八章	「ジャングル」の中の家	120
第九章	長男の誕生	131
第十章	コネティカットのお城	147
第十一章	誤殺	166
	著者あとがき	200

装幀

松本恭輔

涙なんか欲しくない

“Namidananka Hoshikunai” by Helen Parkhurst
Copyright © 1964 Bungei-Shunju Shinsha
Originally published in English under the title of
“Undertow : The Story of a Boy called Tony”
Copyright © 1963 by Helen Parkhurst
All rights reserved.
Rights arranged through Kaigai-Hyōron Sha

第一章 ギャングの息子

「みんながつけた名前が泣くから
よオ、その通りになってやるんだ」

1

初めから予測できない事ではなかったけれど、ロジーナがハーレムの聖墓教会でジョン・フィナツォと結婚した日、それはやっぱりロジーナにとって悪い日になってしまった。

だがその頃ロジーナは、友達に羨ましがられてご機嫌だった。ジョンはイタリア系らしく浅黒い美男子で、人当りもよかった。その上、かなりの額の金をベルトの下のぼろズックの袋に隠していた。ジョンが何で食べているのか誰一人知りはない。おてんとうさまの下ではやれない商売にちがいがなかったが、大層な景気らしかった。

失業者が国中に溢れ、多くのアメリカ人が青息吐息で恐慌と戦っている一九三三年、ジョンだけは例外だった。禁酒法廃止の噂をよそに、酒の密売をやっている連中が幅をきかせ、不景気の暗雲におおわれているマンハッタンでも、密造者の都ハーレムだけはまるで別世界のように繁昌していた。昼間は秘密めかしくこそしているのに、かぎって、夜になると、活気を帯びてきらきらして来る。金を持っていてる連中はハーレム・サヴォイカカールトンで食事をし、キット・カットかパラダイスでルンバを踊った。

二人の最初の子供は女の子で、ルシアと名づけられた。二年経ってトニーの生れる何ヵ月前に、ジョンは家族を引き連れて、ブロンクスの家具付きの大きな家に移った。そして生れて来る赤ん坊のために、古めかしい寝台を買った。ハーレムのイタリア地区で生れ育ったロジーナは訳の分らぬ交際に慣れていたし、めったに質問などしないように習慣づけられていた。それで、ジョンが拳銃を持ち帰って赤ん坊のベッドの下に放り込んだ時も、特に困った様子も示さなかった。しかし、ベッドを覗き込みながら、友達の一人に誇らかに「こいつは俺のもんだ。こいつは今に俺

みてえになるぞ！」と言った時、ロジーナはふと不安になった。

ジョンはよく酔っ払って、朝の四時五時までカードをした。しょつ中、友達を連れて来るので、ロジーナは起き出してコーヒーと卵を作らなくてはならなかった。

トニーが生れた。ジョンは姉のジェニーに電話してこう言った。「トニーに乳母車を買ったんだけど、持って帰るのが恥しいんだ、来てくれねえか。カペラ^りって家具屋の前にいるんだ。乳母車なんか押してるところを他人に見られたくねえからさ」

弟が良い方へ向ってきたと氣をよくして、トニーの伯母は乳母車を押して家へ帰った。しかし、家へ帰ると、ジョンは本当の事を言った。なんと、ジョンは一錢も払っていないしなかったのだ。

トニーがまだ二カ月の赤ん坊のころ、ジョンはサイコロ賭博で家と家具を失った。そして一家は再びハーレムに戻った。ある夜ジョンは、ロジーナにアイロンをぶつけて大怪我をさせた。その後、ロジーナはいくらジョンが言い寄っても、拒み続けたので、ジョンは癩癩^りを起こし、荷物を

まとめて出て行つた。そして二度と帰っては来なかった。ロジーナは、二人の幼い子供を育てるために仕事を探した。彼女の唯一つの慰めは、人も物も懐しい、つき合いも極めて緊密な、ハーレムに戻っていることだった。生活保護を受けながら、雄々しくロジーナは近所の洗濯物を引き受けて一家の離散を防いだ。そんなくらしの中にもロジーナは元気で美しくチャーミングだった。だから翌年の冬、イタリア人の煉瓦工、ジョセフ・ベルコアが彼女に会った時、恋に落ちたのも無理はなかった。

ジョセフは温和でよく働く、頼りになる正直者だった。彼はロジーナが必死の思いで望んでいる安全性を備えていた。ロジーナは彼と結婚した。そして、それなりに幸福だった。しかし、人を浮き浮きさせるやくざのジョン・フィナツォ——青春の花の盛りに情熱的に愛し、そして振り返りもせずのものいわずに去った男——を忘れてしまう事は出来なかった。憎しみは、六年間、ロジーナの心に眠っていた。

再びロジーナが妊娠した時、ジョセフはジョンと違って出来る限りこまごまと世話をやいた。そして男の子が生

れ、ジョセフは仕合わせな父親となった。その後もジョセフは連れ子の二人に良い父親であった。特にトニーは父親を愛し、学校へ行くようになるまで、暖かく愛情深く母と一緒に暮しているこの男が、実の父親でないなどは、思ってもみなかった。どうしてそんなことが考えられよう。ジョンが消え失せた時、トニーはまだ三カ月の赤ん坊にすぎなかったのだから。ジョセフを中心に一家の生活は平和で穏やかなものだった。

ある日のことだった。トニーは七つになっていた。過去が突然ロジーナに襲いかかった。九月の土曜の午後で、学校が始まって一週間目だった。ロジーナは台所でアイロンをかけていた。ジョセフは側に坐って新しいラジオをいじくりまわしていた。肘の所にビール瓶があった。ロジーナは急に目を上げて、台所の真中でトニーがクッキーをモグモグやっているのを見た。トニーは、ジョセフの贈物の初めての長ズボンをはいて、遊びから帰ったところだった。ズボンは泥だらけで、ベルトのバックルが外れてぶら下がっていた。多分手に持っていたアイロンが、長い間忘れようと努めて来たあの男のイメージを呼び起したのだろう。一

目見てロジーナは叫んだのだ。

「実の父親そっくりだ！ ジョンもあんな風にベルトを外していたものだわ！」

トニーが部屋を横切つて来ると、母親は金切り声をあげた。

「お父さんそっくりな歩き方！ おんなじ嫌な顔して。まあ見てごらん。わたしに父親と同じ苦労をかけようとしてるんだわ」

ロジーナは叫びながらエプロンに顔を埋めた。トニーは母親を見つめた。すっかり混乱してトニーはジョセフの後へ隠れようとした。ジョセフは道具を置いて立ち上った。

「やめろ、ロジーナ」厳しい調子で言った。ロジーナは目を睨り、それから踵を返した——あたかも、ジョセフは妻に殴りかかろうとするように見えたのに——トニーがいたので、ジョセフはこらえた。

「トニー、外に行っておいで。ご飯が出来たら呼ぶよ」と彼はささやいた——そして、少年をドアの外に優しく出してやった。

トニーは、友達が野球をしている道を通り越して、ぼんや

り考え込みながら、ジェファーンソン公園の方へ向って歩いて行つた。——まだ慣れない長いズボンをずり上げながら。

2

母子喧嘩はジョセフの気転で中断したが、その日から、トニーは母親の目には厭わしい事しかしてかきなくなつていた。トニーは、あの時、母親の顔に浮んだ嫌惡の表情に脅されてゐた。感情が高ぶつて、もう我慢できないところまで来てゐた。不安で、絶えず恐ろしかった。見た事もない怪物じみた顔が浅い眠りに這い込んで来た。角の生えた恐ろしく醜い化け物が、トニーが悪いといつて彼を打つたのだ。トニーは悪い子になりたいと思つたものでは決してない。が、少しずつ、何に対してもまごつき、誰にも認められない、といった生活に流れ込んで行つた。

学校でも困る事が起き始めた。担任の先生は、彼がのろまで不注意で、行儀が悪い、と小言をいつた。成績はどんどん落ちた。反抗的になり、独りぼっちで深く傷ついてしまったトニーは、何も気にしないふりをしてゐた。

毎日曜日、ジョセフは三七年型リムジンに——図体ばか

り大きいボンコツだったが——家族を全部乗せて、家の物や衣類を買いにデランシー街へドライブするのが好きだった。一家は殆んど物は買わなかったが、どんな小さな物でも買いさえすれば、ジョセフはこの自分で始めた遠征の目的を達したと言うのだった。

時には、郊外の方へドライブすることもあった。そんな時、ジョセフがいつも運転台に坐つた。ロジャーはルシアとジョーイと一緒にジョセフの隣へ陽気に入り込んだ。前、前の座席はあやうく定員過剰で誰かがはみ出しそうだった。トニーは母に命令されて、仕方なく後のシートに独りで静かに坐つてゐた。そして、トニーの気持は日一日狂つていく世界をさまよつてゐた。

「ほんとに、一度でいいから、前に坐りたかつた。だけど、母さんは僕が側へ行くのを決して許してくれなかつた」

車はすごく魅力的だった。トニーは子供らしい辛抱強さと熱心さで、何時間も黒いフードをびかびかに磨きたてたり、ボタンを動かして、窓がちゃんと開け閉めできるかどうか確かめたりした。くたびれるまで、シートのはこりを

払ったり床を掃いたりもした。家の近くに駐車してあると、トニーはハンドルを前にジョセフがするように坐って、見たいものや買いたいものや楽しいものを空想の世界に踊らせながらドライブごっこをした。

トニーは実生活に登場する人間には裏切られ、失望させられていて、徐々に物だけが、気持を満足させてくれる重要な埋め合わせになっていった。ある夜、トニーが食事に現れなかったのも、遅くなってジョセフは探しに出た。そして、トニーが車の前のシートでぐっすり寝入っているのを見つけた。起きた時、トニーはそこで夜を過させてほしいと泣かんばかりに頼んだ。

「家に帰りたくないんだ。おねがいだよ、パパ、ここにいてもいいだろう、今夜だけでいいから」

ジョセフはロジーナを起さないように、そうっと忍び足で家に戻った。そして、古いオーバーを持って急いで駐車場へ行き、眠りこけている少年をくるんだ。トニーの青白い、汚れの筋の何本もある顔を見た瞬間、ジョセフは家に帰りながら、子供が家出したい誘惑に駆られているのではないかと不安に思った。

トニーは九つ位の時のこんな事を憶えている。「チビの弟と姉貴と僕は、いつも、ちっぽけな奥の寝室で寝たものだ」紙みたいな薄い壁を通して、母親が台所で近所のおかみさん連と噂話をしているのが聞えた。「母さんはそれに、僕が学校で困った事をしでかしたって話をするんだ。僕はいつも聞いてた。だって、僕の事を話してるんだから興味あったんだ。母さんが『父親そっくりのいやな振舞いをするようになったのよ。きつと誰ともうまくやっていけなくなるわ。ジョンと同じで、性根が腐ってるんだね』てな事を言う。すると近所のばあが言うんだ。『だって他にどうなりようがあるのさ？ 息子はたいがい父親そっくりになるもんよ』僕はこんな話を聞くのは大嫌いだ。だから、やつらが恨めしかった。仕返ししてやろうと思った。僕がどんなに悪いか母さんに聞いてから、やつらは息子たちに僕と遊ぶなって命令しやがった。道で、そいつらは僕を指差して『ほらあいつだ、不良だぞ、近寄るな』って言ったもんだ」

トニーは、母親の、他の二人の子供達へのえこひいきを恨めしく思っていた。「何故」とトニーは考えた。「ルシア

はきれいなスカートによく合うブラウスをいっぱいもらえるのかなあ。ジョーイはびかびかの革靴を買ってもらえるし。おれの靴ときたらいかさない。GIストアで買った兵隊靴なんだ。ぶっこわれなきやいいと思ってんだらう。おれはいくらかましに見えるように、一生懸命そいつを磨いたよ。学校の身体検査の時、兵隊靴だって先生にも分らないようにと思つて。家族の多い楽しい家でさ、そこが本当に自分の家だったらどんなにいいだらう。でも、事実は正にその逆なんだ」その反応として、この發明の才ある若者は、貧相で歪んだ世界を作りあげてしまうことになるのだ。

「おやじそっくりに生れたからって、そいつはおれのせいじゃないよ」と彼は言つた。「だけど、みんながおれを不良だつて呼ぶようになった時、おれは不良になるしかないじゃないか？　おやじがおやじだからって、みんなが言つた。おやじはどんな奴か知らないけど、そいつみたいな悪党になつてやろうとおれは思つた」

3

ある午後、ブロンクスに住むやくざのリンクが、家へ

夕飯を食いにこないかとトニーを誘つた。リンクは、かねてから目をつけていたトニーのコーチに、いよいよかかうと企んでいたのだった。「金はいくらでも転がってるさ、その気になりやすぐ手に入るよ」

リンクが山分けを申し出た金は、二番街にある大きな建物の三階後側の部屋に隠されていた。そのアパートは非常階段からも屋根からも忍び込むことが出来た。狙つた部屋の住人は引越して来たばかりの人だった。

「そいつは会計士で、手の切れるようなでかい札を新品の長封筒に入れて糊付けしないで積み重ね、箱に同じ種類の封筒と混ぜて入れ、ホールの衣装戸棚の一番上の外に隠している。アパートに入つてその金を手に入れるのはわけねえ」

十歳の男の子の目にリンクが用意周到な男に映らないはずはなかった。必要な事はすべてすでに計算済みだった。どうやってアパートに入り、どう出るかということもだ。部屋の下アは、非常階段に向つた窓の並びにあるホールの端だった。リンクはトニーに「親鍵」を貸すと約束さえした——勿論いくらか払つてだ。木曜日に入れば安全だろ

う。その日は、まだ独身のその住人が、ガール・フレンドの所で夕食を楽しむ習慣なのだ。トニーには全てがひどく単純な事のようにひびいた。その上リンクは、もし成功したら鍵の使用料は請求しないと約束したのだ。

生れて初めて、トニーは鍵というものが拳銃同様、貸し借り出来るものだという事を発見した——そして、「鍵の方がよけい手に入れにくいんだ」という事も。トニーはお金が欲しかった。

その計画を聞いてトニーは有頂天だった。いわば披露されたのだから。他のやくざ達は心得顔に微笑んだ。彼らの間でトニーの噂をする時、いつも言った、「あいつのは血統だからな」そして興味を持って一挙一動を見守っていたのである。

初めて訪ねたやくざのアバートで、トニーとリンクは夜遅くまで話しこんだ。朝になると、トニーの頭から金の事が離れなくなっていた。金の事以外考えられなかった。自分の分け前で、初めてのパーティーに着ていく新しい背広を買おうと思った。金さえ入れば、他の子供達と同じようにおしゃれをすることも出来るのだ。

トニーは木曜日が待ち遠しくて仕方がなかった。午前中は学校に出席し、ほとんど一日中そこにいた。アリバイを作るために。午後の最後の時間が終る前に、地下室のドアから抜け出し、最初の大仕事のためにすっ飛んで行った——ズボンのポケットの裏には、大事な鍵がとめてあった。

胸の中で少年は、今日が自分の幸運の日だといいなと願っていた。彼が育った貧乏人地区では、文化のシンボルは「運」だった。利口で、欲しい物を手に入れるのに元手とやり方とを厭わず必要な事を何でもやる精神ならば、その「運」という神秘的力は、即ち現ナマのことであった。

長いこと、トニーは道を隔てて大きなアバートを眺めていた。その屋上で何度も遊んだことがあったし、登っても見られない内階段を知っていた。非常階段よりその方がいいかも知れないな。

靴を脱ぎ、トニーは誰にも見つからず登っていった。うす汚い手入れしない木の階段を三つ登った。屋上に近づくのはやさしかった。その日は、はね戸も鎖が外れていて押し開けられていた。トニーの細い体がすり抜けるのに造作もなかった。屋上へ出ると澄んだ新鮮な空気で、深呼吸

を一つした。しかしすぐ、彼の黒い眉は心配げに引きしまった。トニーは、他の二つのドアも無理に押し開けられているのを見た。誰かが彼より先に屋上にいたのに違いなかった。「全く」と彼は言った。「ドアが開いてるなんてツイてるなア」

トニーはじくじくしたタールの上を音のしないように歩こうと思った。素早く注意深くトニーは、リンクが言った梯子を探しながら、タールの筋を辿っていった。その梯子が重要なのだ。彼は地上からの階を数えた。たやすく三階のホールの窓をつきとめた。そうだ、それはリンクが言ったように、丁度、非常階段の踊り場の側だった。今、神経を集中してすべきなのは、忍び込む事だ。暑いので、ホールの窓の大部分は、イースト・リヴァーからの風を入れるために開けてあるのだった。

あちこちで、住人達が帰って来て灯りをつけた。この灯りは、小さなガラスのはめてある古い木製の窓枠の後ろに張られた日よけを通してほの白く、うす汚れたごみ箱だらけの横丁を妙に美しく見せているのだった。

トニーはその影の中を階段の方へ向った。突然、トニー

は足音を聞いた。すばやく、たれこめた闇の中で注意深く動いて屋根の端まで行き、自分以外に誰かいるのか見ようとした。トニーは一人の男を見た。警官だった。警棒を振り廻し、アイルランドの歌を口笛で吹きながら、横丁を歩いて行くのだった。

見つかるまいとして身を沈めた時、トニーの足が滑って四つん這いになってしまった——そして、瘦せこけたジューパンの足が、屋根に接した錆びたトタンの狭い溝の側の古い腐った樋の中にはまってしまった。

近ごろ、二番街の受持ち区域に沿って盗みを働いているアパート荒らしを偵察中の警官は、金属のしなう音を聞いた。二番街のビルの短いブロックの後側に接した、昔使っていた非常階段の方へ向いながら、警官は山椒魚みたいに屋根の端にへばりついているトニーの姿を見つけた。この危なっかしい位置では、ちょっと動けば樋ごと下の横丁に落ちるに違いない。傾斜のある屋根の上でバランスをとろうとしながら、トニーは何度も何度もくり返していた。

「ツイてるんだ。俺はツイてるんだ」

無謀な考えが頭の中を走り回った。やぐざの一人が「の

ろまめ、時間はねえ、行動あるのみだ」と言っているのをトニーは聞き続けた。すばやく行動しなければならなかった。鍵もろとも捕えられたら大変だ。弁償するお金など持っていないのだから。どんな事があっても彼は逃げて、リンクが信用してくれるような勇気を持っている事を証明しなくてはならなかった。

警官はどう行動すべきかすぐには決めかねた。やはり待つべきだ。少年がまだ自分を見つけていないなら、今は子供を助けに行つてはいけない。警官はトニーのような若者を知っていた。彼らは捕まるより、恐ろしさと混乱のあまり死を求めて、最高の償いをしかねないのだ。しかも彼は法の番人としての責任を果さねばならなかった。少なくとも、奇蹟だけが少年を救えるというこの場合には。

十年余りの騒々しい短い生活の間、トニーは、何度か恐ろしい慣れない状況を経験して来た。これもまた、新たな挑戦の一つにすぎない。リンクにはおれの実力を見せてやらねばならない。リンクはおれのバートナーだ。リンクなら、きつと分ってくれるに違いない。錆びたトタンで、トニーは足を深く切っていた。そこから血がどくどく溢れて

きた。眼の前が真っ暗になった。が、トニーは心の中で呟いた。「しっかりしろ」

意識が戻って来ると、トニーは記憶を失わぬよう努めたが、足が痛むので難しかった。決心して、彼は気を落ち着けた。幾度も前と同じように言い続けた。「ツイてる、おれはツイてるぞ。とにかくやってみよう」

トニーは目を閉じて呼吸を止めた。体の右側をほんの少し持ち上げて、樋の中の左足を動かさずに、腹這いのままゆっくり身体をずらした。肩と背中を使って最初はゆるく、だんだん強く揺すって、骨ばった左腰を軸としたまま、ほんの少しずつ樋の方へ近づいた。「痛えだろうが、イチカバチかだ」

警官にはトニーの荒い息づかいが聞えていた。少年は、一、二、三と数え、素速く樋を振りもぎった。左足は樋から脱けて、トニーはひっくり返ってどすんとおおむけになった。樋には遠く、まず安全だった。くたびれ果てて、トニーはまた気を失いかけた。この経験をトニーは次のように言った。「高い壁がおれを包み込んでしまうかと思つた。その壁はどんどん高くなって——それから崩れた」激

痛に呻きながら、トニーは意識をとり戻した——丁度古い槌の止め具が外れて、一年分の灰とくずの積みである所へ落ちていったのだ。トニーは深く息を吸い込んだ——見上げると青黒い空に星が輝いていた。夜間飛行機の唸りが頭の上を過ぎた。

逃げおおせたのだ。傷ついた足を引きずりながら、トニーは屋上を非常階段の方へ這い始めた。その短い距離が、疲れ切った、怪我をしている少年には、何マイルにも思えた。が、非常階段はトニーの唯一の出口なのだ。

警官は、決して大した勇気を示したりした事はない。しかし、明らかに少年が逃亡を企てているのを見ると、法の番人としての、彼を捕えるという義務を思い出した。急にポリ公が現われたのにびっくりして、この若い逃亡人は次の手を使った。ボールのようにまん丸になって非常階段にころがり込んだのだ。この体操の演技に少なからず驚いて、少年の苦しい演技が終ると、びっくりした警官はビストルをホルスターから抜いて叫んだ。

「待て！ 動くな。動くと射つぞ！」

危険を察知した獣のように、「ボール」は動きを止めた。

トニーはしゃがみこんでいた。警官の助けで、非常階段の入口に掴まって、彼は立ち上った。

トニーから目を離さないで、背の高い肩幅の広い灰色の眼をした警官は、ビストルをホルスターに戻した。トニーは、苦痛に満ちて待っていた。青白い反抗的な顔をした、鼻筋の通った若いイタリア人——震え戦く獣のように追い詰められたその表情を、警官はじっと見つめた。トニーの足はまず手当てが必要なのに、いつも身なりに気を使うトニーは、片手で外れたベルトのバックルをはめようとしながら、一方の手で裂けたジーンズをひっぱらうともがいていた。

「ま、一種の遊びのつもりなんだ」と警官は思った。彼はこの少年が、タフで残酷な「犬ども」に何度も追いかけられたなどという事に、全く気づかなかった。警官は不思議に思った。トニーも——全く別の理由で——そう思った。トニーは今まで、彼をひっぱたいたりどなりちらしたりしないおまわりに、こんなに近づいた事はなかった。叩きのめされたって仕方のないところなのに。トニーは、こいつは立派な奴だと思った。